

【入試ガイドブック_問 1】

2026 年度入試 十文字学園女子大学 教育人文学部

文芸文化学科 総合型選抜 課 題 (小論文)

【注意事項】

- 1 開始後、小論文用紙の所定欄に受験番号と氏名を記入してください。
- 2 題名欄については、各自題名を自由につけて記入してください。
- 3 小論文用紙は、横書きで記述してください。

以下の文章を読み、ことばが社会のあり方に影響を与え、社会変化をうながしたと考えられる事例を挙げ、あなたの考えを述べなさい。字数は 720 文字以上 800 字以内とします。

「セクハラ」ということばがある。

残念なことに2024年現在、テレビや新聞に「セクハラ」が登場しない日はない。あまりにもよく聞くことばなので、あるのが当たり前だと感じているかもしれない。

しかし、1980年代まで日本には「セクハラ」ということばはなかった。

「セクハラ」ということばがなかったから、セクハラはなかったのだろうか。そう考える人はほとんどいないだろう。むしろ、「セクハラ」ということばが広く使われるようになった結果、セクハラが目に見えるようになったのではないか。

「セクハラ」の例は、ことばには、社会の見方を変化させる力があることを教えてくれる。社会の見方が変われば、社会は変化する。新しいことばが、社会を変化させたのだ。

「ことばの変化」と「社会の変化」の関係については、大きく2つの考え方がある。

ひとつは、「社会が変わったからことばも変わる」という考え方だ。たとえば、コンピューターができたから、「コンピューター」という新しいことばが使われるようになる。これは「社会反映論」と呼ぶことが出来る。「ことばは社会を反映している」という考え方だ。ことばと社会は別のもので、先に社会が変わってから、それに伴ってことばも変わる。しかし、この考え方では「セクハラ」の例を説明することができない。

もうひとつは、「社会構築論」とも呼べる考え方だ。この考え方を唱えたのが、哲学者のミシェル・フーコーだ。フーコーは、ことばは単に社会の変化を反映しているのではなく、ことばで語ることによって、その語っている現象が社会的に重要な概念になると指摘した。

「セクハラ」の例で言えば、人々が「セクハラ」ということばを使い始めたことで、それまで長いあいだ放置されてきた行為が、被害者を苦しめる犯罪として社会的に重要な概念になった。

社会構築論は、ことばと社会は別々なのではなく、両者は密接に関係しており、社会変化がことばの変化をうながすと同時に、ことばの変化も社会変化をうながすという形で、両者の変化がお互いに影響を与えて、ことばと社会が一緒に変化していくと考える。

(中村桃子著『ことばが変われば社会が変わる』より)